

## 転向者・小川未明（上）

——階級闘争から八紘一字へ——

増井真琴

はじめに

これから私が問題にしようとするのは、小川未明の「転向」についてである。未明は大正期、社会運動が盛んな時期は社会主義を、アジア太平洋戦争中、軍部の力が強まった時は国家主義を、戦後、日本国憲法下の新体制が確立されるようになると反戦と民主主義をそれぞれ表立って支持しており、その時々々の時局に合わせ、変節を繰り返した作家だ。例えば、戦中・戦後の次のような文章を見比べてみると、その一端はよくわかる。

いま、日本が先頭に立つて、暴慢な英米と戦ひ、世界秩序の建直しに邁進してゐることを存じてせう。もし、さうしなかつたならば、私達のアジア民族は、彼等のために苦しめられて、終ひには身動きすら出来なくなる運命にあつたのです。さう聞くならば皆さんは、齒きしり

をして、早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか。

〔子供達に〕

（僕はこれからだ）フタバ書院成光館、昭和一七年一月）  
戦争中はいかなる言葉をもつて、子どもたちを教えたか。指導者らには何の情熱も信念もなく、ただ概念的に国家のために犠牲になれといひ、一億一心にならなければならぬといつて、形式的に朝晩奉仕的な仕事を強制して来た。敵は残忍であり醜悪であるといふことを言葉に文章に信ぜせしめようとして来た。それが終戦後の態度はどうであるか、今までの敵を賛美し、まちがつてゐたことを正しいといひ、まったく反対のことを平然として語つてゐる。（中略）子供たちにかかる大人の態度いひかえれば指導者の態度がどう映るか。必ずや嘘つきであ

り厚顔無恥としてうつるにちがひない。

「子どもたちへの責任」(『日本児童文学』昭和二年九月)

時宜に依じて「まつたく反対のことを平然として語つてゐる」のは当の未明に他ならない。未明には、同時代に政治的影響力を誇つた勢力と添い寝する便乗的傾向があつた。

しかるに、未明のこの「転向者」としての側面は、従来必ずしも注目されてきたとは言えない。鳥越信はこの点について、「ともかくこんなにはげしくゆれ動いた作家は珍しいと思ふが、もっとふしぎなのは、そうした未明への否定的・批判的な評価はほとんどなく、常に未明はその時々々の日本児童文学の頂点に立つ作家として、高い評価を与えられてきた点である」と指摘している。確かに未明は、昭和三六年に逝去するまで、日本児童文学者協会初代会長や文化功労者、芸術院会員へ推挙されるなど、長らく「日本児童文学の父」として君臨してきた。山中恒は「日本児童文学最高の作家とされたきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」と語っている。

もちろん、「文学者の戦争責任」は戦後喧しく議論された論題であり、戦時中の国策協力に關して、未明も後進から批判を受けることはあつた。しかしその多くは、断片的な分析ないし感情的な指弾に留まるもので、中長期的な思想遍歴を

追うという意味での「転向」という視座から行われたものではなかつた。

私の問題意識は、これまで未明神話の陰に隠れ、断片的にしか論じられてこなかつた未明の「転向者」としての側面を、通史的に明らかにすることにある。大正・戦中・戦後を通して、未明は如何に自己の言説の装いを變えて行つたのか、また上記のような變遷を経ても變わらなかつた未明という人間の思想の核は何か、考えたい。

本稿では、大正から戦中に時期を絞つて論じる。

### 一 社会主義の影響

明治期、新浪漫主義の旗手として文壇に登場した小川未明は、大正から昭和初期にかけて、社会主義思想の影響を受けるようになる。本節では、この時期の未明の足跡を追いたい。

未明が社会主義思想の影響をこうむる前史として、まず早稲田大学時代のロシア文学の洗礼が挙げられる。改造社版『現代日本文学大系集 第二十三篇』(昭和五年四月)の自筆年譜には、明治三四年の項目として、「この頃より、ロシア文学を愛読し、また、ナロードニキの思想を好めり」という記述がある。若き未明は、トルストイやツルゲーネフを耽読し、ロシアの農民運動へ共感を深めていた。また早大卒業後

の明治三九年には、戸張狐雁の紹介で、東洋經濟新報社に片山潜を訪ねている。片山はイエール大学を卒業後、幸徳秋水らとともに日本初の社会主義政党である社会民主党を結成した、日本の社会主義運動の先駆者と言える存在だ。

大正期に入ると、未明と社会主義の接触は本格化する。その端緒となったのが大杉栄との出会いである。大正二年、大杉が「近代思想」の「小説三編」（大正二年六月）で、未明の「嘘」を論評したのを機に、二人の交友は生まれた。大杉は初対面の未明を見て、荒畑寒村を想起したという。一方未明は、大杉の感化でクロボトキンを愛読するようになる。更に同年、未明の短編集「屍墟」（新潮社、大正二年一〇月）が刊行されると、同郷の相馬御風が「読売新聞」紙上でこれを書評（「人間性の為の戦ひ」大正二年一〇月）、翌年大杉が「近代思想」で反論した（「時が来たのだ」大正三年一月）。これは未明作品に「物質生活の圧迫の為に虐げられて行く現代人の運命」を見、「社会組織の革新」をうながす御風と、それに一定同意しつつ、曖昧な革新論ではなく、「社会科学的知识」に基づいて、より精緻に「敵」（資本家、国家）を見定めるべきと主張する大杉の対立だった。論争そのものは未明から離れたが、この論争で示された大杉の階級対立の歴史観と知識階級批判の思考は、以後の未明に流入している。加えて、自身が直面した生活苦と愛児の死も社会主義へ向か

う下地となった。既に明治末の自然主義全盛期から貧乏に苦しみ、大切にしていたラフカディオ・ハーンやメーテルリンクの蔵書を売り払っていた未明だが、大正期においても「宛に着物もなく、書物もなく、妻が指にはめていた指輪を抜き取らせて」生活費の足しにしたという。そして困窮下、大正三年に疫癘で長男・哲文を、大正七年に結核で長女・晴代を失ってしまう。夭折した我が子の死に、未明は激しく消沈し、数ヶ月の憂鬱病にかかる。彼は後に、次のような自責の言葉を書き記している。

私は、最も逆境時代に生れた、二人の子供を亡くしました。若し、健康でいたならば二人は、いかにこの世の中が苦しいところであらうとも、また幾多生を享樂すべきこともあつたのにと考へると、親として、悔恨の深いものがあります。

「貧乏線に終始して」（「婦人之友」大正二五年一二月）

だが逆に、こういった不幸の実体験は、未明の社会的弱者への想像力を豊かにした。片山社秀は、大正七年の小説「戦争」における未明の第一次世界大戦——近代史上初の世界戦争で大量の戦死者が出た——への想像力は「ひとえに長男の死のみを懸け橋にしてヨーロッパとつながっている」と指摘

している。

折からの大正アモクラシーの高揚と呼応し、左派系の文化・政治団体、労働組合での活動も目立つようになる。大正五年には、嶋中雄三の組織した文化学会の会員となった。大正八年には、大庭柯公らが知識人組織として立ち上げた著作家組合の組合員となる。大正九年には、堺利彦や山川均らとともに日本社会主義同盟の設立発起人に連名。同団体の機関誌「社会主義」の編集委員へ就任した。大正一〇年には、第一次日本共産党の源流の一つとなった暁民会の講演会に出席し、エロシエンコや加藤一夫と講演している。大正一一年には出版従業組合員として日本初のメーデーに参加。警官の暴力に対し、靴で蹴り返したと、後に関英雄へ述べたという。

文壇においては、大正八年、自身の起こした背島会を母体に機関誌「黒煙」を創刊。未明は顧問を務める。新井紀一や内藤辰雄が参加した同誌は、労働者文学の拠点となった。その後の未明は、「労働文学」「種蒔く人」「解放」「新興文学」「文芸戦線」「社会主義研究」「虚無思想」「矛盾」「黒色戦線」など、数多くの左派系文芸雑誌へ寄稿している。また並行して、「早稲田文学」「中央公論」「新潮」「太陽」「大観」「文章世界」「文章倶楽部」「中央文学」「文芸春秋」「改造」「婦人公論」「婦人之友」といった一般誌でも旺盛に執筆した。

文学団体では、大正一四年に日本プロレタリア文芸連盟が設立されると、これへ参加。ただし翌年にはアナボル対立の一環として、早くも排除されてしまう。以降、未明はアナボルの立場に立ち、ボル派＝マルクス・レーニン主義への不信感を強めながら、日本無産派文芸連盟（昭和二年）、日本左翼文芸家総連合（昭和三年）、新興童話作家連盟（同前）、自由芸術家連盟（昭和四年）と活動の場を移して行く。なお、昭和八年に設立された解放文化連盟には、壊滅する昭和一〇年まで陰で資金提供を行っていたと秋山清は証言している。

話は前後するが、未明は大正一五年に「今後を童話作家に」（『東京日日新聞』大正一五年五月二三日）を発表した。今後小説の筆を断ち、童話のみに専心する旨を綴った、いわゆる〈童話作家宣言〉である。この宣言の真意は多くの識者によって検討されてきた。例えば山室静は、初期社会主義文学の先駆者であったアナ派の未明が、ボル派に運動上・文学理論上のヘゲモニーを握られた結果、童話に逃避したのではないかと捉えている。この山室説は、現在までおおむね踏襲されていると言えよう。

ところで、未明の次女・岡上鈴江によると、彼の自宅には大正一一年頃から特別高等警察の刑事が定期的に訪問するようになっていたという。当初は玄関前の「通りをへだてた向い側の塀のあたりに背をもたせかけて、煙草をすったり、何

気なく道いく人をなめる様子をしながら、ちらつ、ちらつと鋭い目つきで探るように私の家の方を見ていた」だけだったのが、その内「毎日同じ時刻、玄関の戸をあけ、大つばらに訪問するようにな」り、「今日はどこへでかけたかとか、誰々がたずねてきたかなど聞いて、いちいちメモをしていった」そうだ。岡上は刑事が「いつしか父の淡白で正直な人柄に好感をいだくようになり、特高課の刑事という職業をはなれていろいろ世間話をしていくようになった」と述べているが、これは多分に身びいきであろう。情報収集を効率よく進めるために相手と打ち解けた関係を構築するのも刑事の仕事だからだ。むしろ、弾圧の当事者として、当時の（アカ狩り）の第一線に立っていた特高警察と融和的な態度を取れず、しきるところに、未明の社会主義者としての不徹底さが伺える。大正一二年の関東大震災直後は、自警団の襲来を恐れ、一家で数日間、坪田譲二宅へ避難した。

## 二 「ブルジョアを脅威せよ！」——階級闘争の鼓吹

このように、小川未明は大正期、社会主義と急速に接近していった。知友・大杉栄の虐殺や、特高刑事の自宅訪問など、社会主義運動に関係することで伴う弾圧は確実に存在したが、それでも彼は昭和初期まで、各種左派団体との接点を

失わずにいる。本節ではこの時期の未明の思想の特徴を、作品に即して分析してみたい。

第一の特徴は、資本主義の否定である。

資本主義の道徳は、無産者に、特権階級の犠牲者たることを強めるばかりでなく、それを正当たりとするものである。資本主義制度の下には、正義がない。道徳がない。宗教がない。芸術がない。存在するものは、資本主義化されたる正義であり、道徳であり、宗教であり、芸術である。現代の文明は、資本主義化されたるために、文明の真精神を没却し去つてゐる。

「プロレタリアの正義、芸術」〔解放〕大正一二年八月  
併し私は敢て云ふ。真実に真理の進行と供に、人間愛を感ずるものであつたなら、今日の社会に於て社会主義者たらざるを得ないと。(自分さへ善ければいい)と云ふ資本主義の精神と、(社会を善くすることに於てのみ自分を善くする)と云ふ社会主義の精神とは、其の根底から倫理的に非常に相違がある。

「人間愛と芸術と社会主義」  
〔未明感想小品集〕創生堂、大正一五年四月

未明が資本主義を批判するのは、それが「無産者に、特権階級の犠牲者たることを強める」ため、すなわち、持つ者と持たざる者の格差を必然化するためである。資本主義は、平等とかけ離れた富の偏在をもたらず制度として認識されている。だから、貧者に対する「人間愛」を持つ者は、彼らの救済を目指す「社会主義者たらざるを得ない」。未明はこう考へる。

未明の社会主義への入り口はこのような格差批判のヒューマニズムだった。しかし秋山清が「ヒューマニズムから社会主義にはいつていった人には論理的な解剖は弱いですからね」と語るように、あるいは統橋達雄が「その感想や小説において、社会の不合理・矛盾への怒りは繰り返されても、社会科学的分析の深化や未来社会への具体的なプランを明示することはなかった」と語るように、未明の資本主義批判は没理論的だ。資本主義を激しく否定する文章は数多くあるのだが、字数は共通して原稿用紙数枚程度であり、内容的にも、マルクス経済学や史的唯物論といった科学的社会主義の素養は感じられない。情緒と修辞で資本主義社会の理不尽を感情的に訴えるのが未明の手法だ。この苛烈なアジェーションに読み手は圧倒されてしまうのだが、繰り返すように、理論はない。

やや先取りして言うと、その時々々の流行思想を身にまと

い、躊躇のない断定を繰り返すのが未明の思想的文章の特徴で、この特徴は戦時下の国家主義、敗戦後の戦後民主主義時代においても確認できる。

第二の特徴は、階級闘争の推進である。

この社会には、いつの間にか、搾取する階級と搾取される階級とが出来てしまった。私達が正直に、誠実に、勤勉に働き、また人生のために思索しつつある間に、いつの間にか、この社会には、正義も、人道も、良心も無視して、私達が正直なるがために、誠実なるがために、いいこととして頭から押へ付ける権力階級といふものが生じてしまったのだ。(中略)労働祭は、全世界の無産階級の結束すべき日だ。正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！

「労働祭に感ず」(『時事新報』大正一二年五月)

「ブルジョアを脅威せよ」とは革命家のような物言いだ。この時期、階級対立の存在を鮮明に自覚した未明は、その対立を実力で解消すべく、階級闘争の推進者となつて行く。未明は一般にアナ派の論客として知られており、その思想は、空想的社会主義の範疇におけるものと理解されている。しかし、歴史を貫く階級対立の存在は信じていた。これは同時代

の大杉の影響が大きいだろう。<sup>16)</sup>

さらに未明は知識人を、ブルジョアの階級支配を補充する提灯持ちとして批判している。

私は、眞の敵が、常に対立した、反主義者にあるばかりとは考へない。たとへば社会主義に、対立する眞の敵は、もとより資本主義には相違ないが、これあるがために、闘争的意志は強められ、信念は、益々浄化される。しかし、其の間に介在する灰色の階級や、主義者は、却つて相互の闘争的精神を鈍らせるばかりでなく、真理に向つての前進を阻止する妨害をなすことを知らなければならぬ。一般に知識階級が、ある時期に際して、憎視され、甚だしき反感を買ふのは、これがために他ならぬのであります。

「芸術は革命的精神に発酵す」(「解放」大正一二年一月)

知識階級は、プロレタリアの「闘争的精神を鈍らせ」る「灰色の階級」である、というのが未明の見立てだ。その上で彼は、自己を知識階級の一員として認識しており、知識階級が無産階級の闘いへ連帯し、共闘することに階級闘争の展望を見出している(と同時に、知識人が決してプロレタリアには成り切れない点を自覚し、一抹の孤独を感じている)<sup>17)</sup>。これ

は大杉が相馬御風との論争において、御風らを「紳士階級の進歩思想家」と規定し、芸術家的な「親照の法悦」<sup>18)</sup>に留まらぬ、社会運動の実践を求めていた論旨と重なる。前節で述べた通り、大杉の階級対立の歴史観と知識階級批判の思想は、未明に流入していたと考へられる。

第三の特徴は、反戦意識だ。

人を殺し合うといふ事実のいかに不合理で、罪悪であるかをこれによつて痛感することがないのか。現状に於ては、戦争が仕方のないこととしても、人生からこれを除く、其の理想に向かつて尽さうとはしないのか。子供を持つてゐるすべての親は、子供の可愛いことを知るであらう。年老つた親を持つてゐるすべての子は、親の身の上について思ふだらう。この至情の全くない輩は、私は人間として取り扱はない。其等の子供が戦場の野に於て殺された時の親の心、親が敵兵に虐殺されたのを知る時の子供の心、自らの経験でなくとも其れを察することが出来る筈である。

「戦争に対する感想」(「太陽」大正七年八月)

戦争、それは、決して空想でない。しかも、いまの少年達にとつては、これを空想として考へることができない

程、現実の問題として、真剣に迫りつつあることです。帝国主義の副産物として、戦争を避け得られないことは、説明すべく、あまりにはつきりとした事実でありま  
す。(中略) 朝に、晩に、寒い風にも当てないやうにして、育てて来た子供を機関銃の前に、毒瓦斯の中に、晒らすことに対して、ただこれを不可抗力の運命と視して考へずにはいられやうか？

「男の子を見るたびに「戦争」について考へます」

〔婦人之友〕昭和三年五月

ここで未明は「子供が戦場の野に於て殺された時の親の心、親が敵兵に虐殺されたのを知る時の子供の心」を付度し、「子供を機関銃の前に、毒瓦斯の中に、晒らす」つらさを語っている。国家主義時代に入ると、未明は施政者の目線で「聖戦」の意義を強調するあまり、実際に戦いの現場で流血し、命を落とす人間への想像力を失っていくが、この時期はまだ民衆の目線から、戦争がもたらす惨禍を見つめていた。例えば、童話「強い大将の話」(『読売新聞』大正九年一月一五—一八日)では、大戦に勝ち凱旋する大将を欺く女性たちの虚言を通して、英雄の名替の裏にあまたの名もなき民衆の死と、遺族の苦しみがあつたことを別決している。

また未明は、「帝国主義の副産物として、戦争を避け得ら

れないことは、説明すべく、あまりにはつきりとした事実」と述べ、戦争とは、国家の利益のために罪のない民衆を翻弄するものだ、という戦争観を提示している。これは童話「野薔薇」(『大正日日新聞』大正九年四月二日)や小説「血の車輪」(『文学世界』大正一一年一〇月)でも反復されるテーマだ。「野薔薇」では、国境警備を担う隣国の青年と老人が描かれる。二人は国の違いを超えて仲良くしているが、その内「二つの国は、何か利益問題から戦争を始め」、青年の国の兵士は「みなころし」にされてしまう。本作では、恨みのない善人同士に殺し合いを強いる国家権力の恣意性が描出されている。「血の車輪」では、「祖国を救え」という掛け声の下、「手足の立つ働き盛りのもの」はことごとく戦争に動員されようとしている。家族らは反対し、戦地へ出発間際の汽車を取り囲むが、老将校は「祖国の危急には換へられない」と断じ、汽車を発車。民衆を引き殺し、車輪は血に染まる。「野薔薇」と同じく、国家の都合で民衆に戦争を強いる国家権力の残酷性が告発されている。

これらの作品から明らかなように、社会主義時代の未明は、戦争における国家と民衆の利害を相反するものとして捉え、民衆側の受難に寄りそう姿勢を堅持していた。



注

- (1) 鳥越信「小川未明」(鳥越信編『鑑賞日本現代文学第6巻 児童文学』角川書店、昭和五七年七月)
- (2) 山中恒「戦時児童文学論」(大月書店、平成二年一〇月)
- (3) 上笠一朗「戦後の小川未明の思想」(『日本児童文学』昭和三年一〇月、乙骨淑子「小川未明ノート——文学革命のゆくえ——」(『文学』昭和四〇年五月)、五十嵐康夫「戦後の小川未明」(『日本児童文学』昭和四七年一月)。近年、山中恒が著した『戦時児童文学論』(同前)は、昭和期の未明の国策協力を詳述した労作だが、本書は戦中を単独で取り上げているため、大正や戦後との比較はなされていない。
- (4) 大杉栄「大久保より」(『近代思想』大正二年九月)には、「僕は未明と云ふ人には始めて会つたのだが、その頗る真面目なしかし激越な、心の底から湧いて出るような感情の声を聞いて、ちよつと寒村を思ひだした。相馬も「いや、全くさうですよ」と同感してゐた」とある。
- (5) 秋山清は、「(聞き書き)社会思想家としての小川未明」(『日本児童文学』昭和四九年一月)において、未明が昭和一〇年頃、「わたしは世の中がどんなふうに曲がっても、クロボトキンを脱むと、背空があるような感じがする。そう思いませんか」と語っていたと回想している。
- (6) 小川未明「貧乏線に終始して」(『婦人之友』大正一五年一二月)
- (7) 片山社秀「未完のファシズム」(新潮社、平成二四年五月)
- (8) 塚原健次郎・坪田譲治・波多野完治・与田準一・奈衝三郎・滑川道夫・関英雄・山室静・菅忠道「座談会 小川未明の人と文学」(『日本児童文学』昭和三六年一〇月)
- (9) 注5と同じ。
- (10) 山室静「小川未明論」(『現代日本文学全集70 田村俊子 竹林無想庵 小川未明 坪田譲治集』筑摩書房、昭和三年一月)
- (11) (12) 岡上鈴江「又小川未明」(『新評論』昭和四五年五月)
- (13) 小川未明「本然的の運動」(『新潮』大正八年九月)には、「富む者は益々富み、貧しく、働く者は、益々苦しくなるといふのが現時の状態である。子供が病氣をしても、思ふやうに手を尽してやる事が出来ず、また、親が病氣でも仕事を休むことすら出来ないのが、吾等、無産階級の有様である」との記述がある。
- (14) 注5と同じ。
- (15) 統橋達雄「解説」(統橋達雄編『日本児童文学大系5巻 小川未明』ほるぷ出版、昭和五二年一月)
- (16) 大杉栄「征服の事実」(『近代思想』大正二年六月)では、「歴史は複雑だ。(中略)しかし古今を通じて、いつさいの社会には、必ず其の両極に、征服者の階級と被征服者の階級とが控へてゐる」と、歴史を貫く階級対立の存在が主張されている。
- (17) 小川未明「堤防を突破する波」(『中央公論』大正一四年六月)では、語り手の男が労働者のデモを見て、次のように慨

嘆する。「しかし、これには、正直に働いて、生活する者しか加はつては居なかつた。幾千幾万の無産者の群ではあつたが、所謂、インテリゲンチヤは加はつては居なかつた。その資格が認められず、また、加はる権利を有しなかつたからです。(中略) それにしても、この知識階級一人である私の心は限りなく淋しかつた」

(18) 大杉栄「征服の事実」(同前)でも、「征服階級と被征服階級との中間に在る諸階級の人々は、原始時代の彼の知識者と同じく、或は意識的に或は無意識的に、此等の組織的暴力と瞞着との協力者となり補助者となつてゐる」と、知識人のありようが批判されている。

(文学研究科日本文学文化専攻博士前期課程一年)